

---

# LOVE , 9 1

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

LOVE , 91

### 【Nコード】

N4037F

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

一九九一年、まだバブルだった頃。その頃に出会った君との思い出。チェッカーズシリーズ第三十五弾、後期のゆったりとした曲です。

## 第一章

LOVE / 91

ずっと昔の話。まだバブルとかそんなことを言われていた頃。

鼻屑のヤクルトが阪神を何とか破って優勝して野村さんが宙に舞った年。結構色々あったけれど一番憶えているのは君と出会ったことなんだ。

あの時君に出会ったのは木漏れ日のテラスだった。君にはじめて出会ってすぐに見惚れた。飲みかけのカプチーノをそのままにして君に見惚れたんだ。

思わず声をかけたらそれに応えてくれた。まるで夢みたいだった。

「何かしら」

「あつ、いや」

何て言えばいいかわからなかった。ただ無意識のうちに声をかけただけでそこまで考えていなかった。それでも君に声をかけたのはじまりだった。

「あの、ちよつと」

「ナンパ？」

わかっていたから笑顔で応えてくれたのはわかっている。今も。

「面白いわね。乗ったわ」

「乗ったの？」

「ええ。丁度タイプだしね」

水色の服に艶やかな笑顔が映えていた。水色の君はあの昔のアメリカ映画に出て来る美人みたいだった。水色のマリリン・モンローだった。ふわふわした軽い服が丁度そんな感じだった。金髪じゃなかったけれどモンローは本当は黒髪だったらしいからそれでいいとも思った。

「乗るわ」

言いながら僕の席のところに来て座った。ウェイトレスに声をか

けてから。

「それにね」

「そう。じゃあ」

「一緒にを御願い」

僕の飲みかけのカプチーノを見て言ってきた。

「カプチーノをね」

「それでいいんだ」

「ええ。ただ」

君はここでまた僕に言ってきた。

「今はナンパでいいけれど次はしっかりとしたのがいいわ」

「デートってこと？」

「ええ、そうよ」

にこりと笑って頷いてきてくれた。

「デートがしたいんだけれど」

「今からじゃ駄目かな」

「今はナンパじゃない」

こう言って断ってきた。今の僕の誘いは。

「今度ね。電話番号渡すわ」

「そりやどうも」

この時はまだ携帯電話なんてものはなかった。思えば本当に昔だ。あの時は随分ハイテクな中に暮らしていると思っていただけで今程じゃなかった。もっとも十五年も経てばその時も同じことを思うんだろうけれど。

「じゃあそういうことで。その時にね」

「うん。その時に」

これで話が決まった。電話番号は本物だった。どうやらマジで好かれたらしい。それにまずは喜んでから彼女と話して日時とか待ち合わせ場所に行く場所を決めて。それでその日に待ち合わせ場所の銅像の前に行くとか向かい側の歩道から小さく手を振って僕のところに来て来た。やっぱり服はあの水色のふわふわとしたワンピース

だった。あの時と一緒に格好だった。

「待った？」

「ううん」

この時のやり取りはデートのやり取りの定番だった。

「今来たところさ」

「そう、よかった」

君は僕の今の言葉を聞いて笑顔を浮かべてくれた。

「それならね」

「じゃあ行くか」

「ええ」

待ち合わせ場所に來た君といっしょに向かったのは吹き抜けのギヤラリーだった。人影はまばらで僕達は静かなデートを楽しんだ。

## 第二章

その中で君は一枚のウォールホールの前で立ち止まった。僕はそれを見て見惚れていた。

「いいわね、これ」

「そうかな」

この時僕は狙っていた。今だから言えるけれど。

「別にそうは思わないけれど」

「そう？ここにるので一番いいと思うけれど」

「精々二番だね」

僕はこう答えた。

「どう見ても」

「じゃあ一番はどれなの？」

「目の前にいるよ」

「目の前に………いる？」

君が僕のその言葉にキョトンとしたのと丁度そこに誰もいなかったのがラッキーだった。念の為に素早く辺りを見回してから君に顔を近付けて。すぐにキスをした。見逃さなかった。

「えっ………」

「やったね」

驚く君の目にウィンクした。これで決まった。

「これでね。君と一緒にになれるね」

「参ったわね」

唇を左手で押さえて真っ赤な顔で呟いたのは今でも覚えているよ。

「こんなふうになれるなんて」

「駄目だったの？」

「いいえ」

僕の言葉に首を横に振ってくれた。いい意味で。

「いいわ。けれど」

「けれど？」

「今度は私の番よ。次のデートの時にはね」  
「どうするの？」

君の思わせぶりな笑みを見てまた君に尋ねたね。

「それで」

「その時にね。わかるわ」

「そうなんだ」

それで今度のデートが決まった。場所は所沢の西武球場。外野の応援席は綺麗なグリーングラスだった。そよ風がさして試合が見られる。あの頃西武は憎たらしい程強かった。これも本当に昔の話になったけれど。

僕は最初試合を見ていたけれど何時の間にかうとうとしていた。今思うと君はこの時を狙っていたんだってわかる。僕がうとうとするその時を。

気付くと僕が最初に見たのは水色の宇宙。一面の空だった。

「寝ていたんだ」

「そうよ」

君の声が聞こえてきたのを今でも憶えているよ。

「気落ちよさそうね」

「座っていたと思うけれど」

「最初はね」

また君の声が聞こえてきた。ここでその声为上からなのがあったんだ。

「そうだったけれど」

「そうだったんだ。それに何か」

やっと気付いた。頭の後ろに感じる柔らかな感触に。柔らかいだけじゃなくて暖かった。温もりを感じていたんだ。

「暖かい。どうして」

「知りたい？」

僕に尋ねてきたその時。君の声は笑っていたね。

「それがどうしてか」

「うん」

そして僕は。君のその申し出に頷いた。どうしてもそれを知りたくて。

「どうしてなの。それは」

「これよ」

「これ？」

僕が何かわからないでいたその一瞬の間に君の顔が上から出て来てそれで僕にキスをした。あの時とは完全に逆だった。

「こういうことなのよ」

唇を離した君が微笑んでいた。僕の顔を覗き込んで。これでやっとわかった。僕も。

「そういうことだったんだ」

「そうだったのよ」

「膝枕」

それを呟いた。

「君の膝枕だったんだ」

「嫌かしら」

「ううん」

微笑んでその言葉に首を横に振ったね。憶えているよね。

「こんなことしてくれるとは思わなかったけれど。それでも」

「嬉しい？」

「嬉しくなかったらさ」

また言ったの。憶えているかな。

「すぐに頭を起こしてるよ」

「そうよね」

「あつ、飛行機」

天使みたいな笑顔の彼女の上に飛行機雲が見えた。けれどそれは一瞬だけ見て僕が見るのはやっぱり。君だけだった。

「これからさ」



「これから？」

「何時までもこうしていたいよ」

これがプロポーズの言葉で。二人の時間が永遠に一緒になることのはじまりだった。

「それで。いいかな」

「・・・・・・ええ」

にこりと笑った君の笑顔は今でもカラーのままでセピア色になんかならない。あれからもう随分経って君と結婚してかなり経つけれどそれでも。

君の笑顔はあの時と変わらない優しいまま。その笑顔を見て今日も過ごすよ。君だけを見て。

LOVE '91 完

2008・4・5

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4037f/>

---

LOVE , 9 1

2010年10月8日15時58分発行